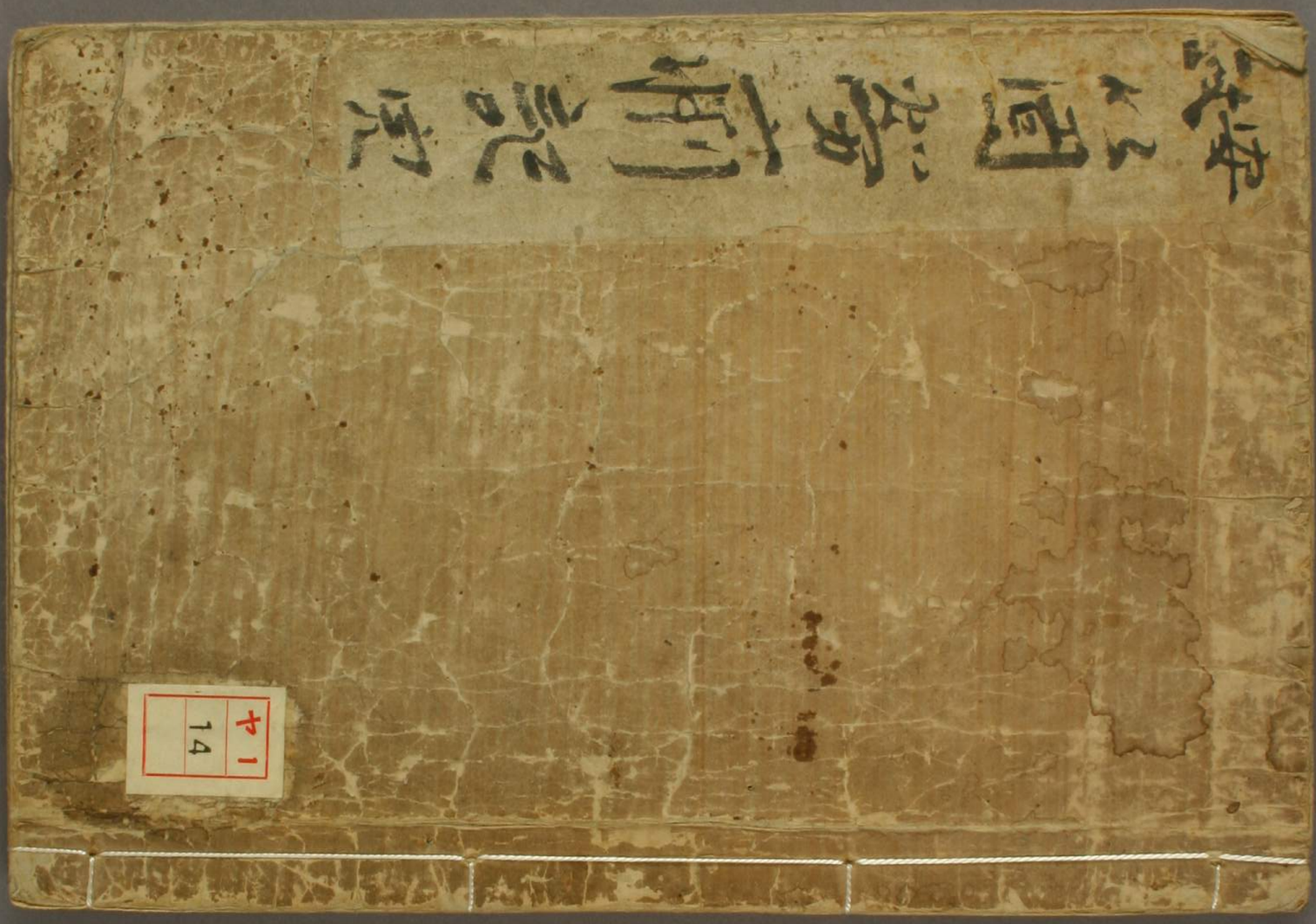
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT



ヤ 14

ヤ1
14

門跡
14
巻

京都帝国大学
図書之印

轉寢の極同序

正享間紀てゝ書付申る正德六年の末夏
熱病物おそゝ世間流行て大江戸のもちゝ
病て死る個月のうちに八萬人に隆り如るる者
棺を入いまゝ〳〵湯の雲橋を渡て亡骸
おゝ見る院々堂塔送る物き土砂塔も埋る
程人あらぬ宗体を悔をび火葬あゝ

猶相きめ沢こう結ぶ雖も繁き世形を
相く数の枝の数うぎうも形く猶重て半月をもれ
ぬるも憐をて猶さび列来の順を待ぞは数るかな
紅く実に老た亡骸いかのこうも生ぎるく変の
長のたかくひるも痛このぐく絶列
公聽を術へまうしてに暴るかくこも泰命を蒙り
速お寺境におかもく葬至経き回向乃後列

篇れりを色く和を変せ品川の沖を出づ発て
水葬を形きをのひとぞ紀うされ変ぶびの
暴病を人結おく横きるを月の事を
似のひれがいう一戒当時をたくらべ今もむし
ぶる形う漢拍をを法をんりのを学をめびを
うひをうう新老婆心をむぶに見横をら作の
和歌形く一種の晴紀をりく序を横るりの

安政元年の秋きく月
ち発行はるにふさいわりにすむ
紀の物ろがるん

白様道人華

安政箇勞痢流行紀聞畧

紅花の風千載芳名の彰よ移り。世ある物の衰ること。世せのあひ自然あり。さるゆふ常ある風ふ後ふ先ふ。

又ちうる業ふて。生死ふ没て。夢ふ。おのいあれ海内流布の暴涙病ふて死する。元徳の四ふ更ふ年こふ男ひ設ゆ。今茲安政五戊午年六月中旬東海道筋より流行和近国一国ふひろごりて。此病ふ犯さるゝ者九死ふ一生。殘つい稀なり。さて備るべい玄米ふ僧ゝ粥ふ月前ふ月前ふ。ちる土地といりふ。大江戸の上旬。

赤坂辺ふ旅り。墨岸寺辺ふも多くありて。日々に徒死ふ
相移り。八月上旬より中旬ふ到りて。病毒益〻盛んふして。死者甚
大なり。一所ふ五六人。葬礼の棺大石ふ迫ふ陸
続て。墨板と藁を絡る間なく。此府内数方の寺院。何の所も
門前ふ棺を列し。焼場の枝不せ切まで積重ねて火を焼せり
夕ふ人を焼葬坊も。且ふ茶毘の烟絶ることなく。郷人ら墨
石塔屋も。今の名ふ自己が名を五輪ふ刻ふ。一々ふ言も
尽さず。竹織の簿ふ傳の史も被閲て。未かつて倒を見
出ず。名ある医工の祖宝ふも。病根を詳と知ること能
徒ふ歌を綴り。手を拱て死と待而已。効も方役ふ
適々芳香散のみ。御傳方。和蘭シーボルトの経験なんど教意
の要方を得るも。卒病所死用ふ宜敷く。後するふ所と多ふ
土佐病毒を抵抗と揮号して。あるは鏡を流言。妖怪変化の
所為なりとし。且水毒といひ魚毒とも是が為ふ市中の上下。死亡
清丈玉川の流を汲ず。魚ふ酒る生魚を喰ず。雖も猶ほ日夜に
病ふ犯されんと戦慄ひ。門戸ふ諸神の守札を張八の諸の禁を

紙一撓。十字術い陳寄の神響を舁出。獅子獅と舞し。
幣帛を振瓊繒ゝし。新亟家家と接淨める中日びかゝる年の
疫色めぐしとゆゝり。門巡ゝ松竹を繞ゝ五七五三縄と引
巡ゝし。奥座と爾るあまび。尼御ゝ外面ゝ出るあり。その松
祇園舎と年號ゝを書ゝる。地せり。長ゝん未曾有の珍ゝり
ゆて。去冬来の不吉凶ゝれば。目前ゝ見ゝ顔未と記ゝ川の尼。
神仏の応護霊薬の効驗ゝ。ゝ就ゝ。後患ゝ
寄人ゝ年の新ゝ絵ゝ重地道人ゝ

於出島千八百五十八年安政七月十三日　當日永安政五年九月

出島三日中出島市中ゝも一時ゝ下劇ゝ迅ゝ吐ゝ下ゝ右悪病
ゝ来既ゝ昨十二日一時ゝ三十人相頻ゝ又亜墨利加悪氣新ゝシツ
ヒーゝかゝゝも右松ゝ服病人数ゝ死ゝ右病原ゝ定ゝ
流行ゝ中ゝ生ゝ右ゝ他國ゝも此日ゝ多ゝ殺ゝ中ゝ
一藩國唐ゝ伝ゝ諸湖市海岸ゝコレラアレアテイス病名
流行ゝ仕右ゝ付日ゝ死失人数ゝ中ゝ由伝ゝ出ゝ
孤生ゝ歐羅巴人ゝ右下劇ゝ毒ゝ外変症ゝ実
のコレラ病ゝ成松防方ゝ仕儀ゝ中ゝ右ゝ掃松

其実を煮て中毒し害と為る成の食物形熟する中雲に右食
物禁止仕候者多く有之事

第一 胡瓜
第二 西瓜
第三 李 杏子 桃

右三品は毒極大事にて下痢不可服物なる故に第三品を
於日本和用は極く未熟の菓物是を以害を為す中に
歐羅巴に諸国共に貴ぶ国にて右極く病気多く
右病に堪長湯に為其国民に右害を成の食料に儀

告知せ切編 黄黍禁忌の必用に儀と中有の候に和
蘭政府醫師多く役目より人と為る中上
右に通り養生法一統の方法を
第一 朝夕西瓜未熟に杏子李等を和用の儀堅禁の事
第二 人に裸にかつぎ夜気と福ふ中極に横に歩
改め衣類羅ぬど麻入中写義の事
第三 日中暑気と雨降り仏労に仕事致す義
第四 婦懐弱に形体より酒呑色の儀
右成の事

丹丈若し下劑お覺いつゞき根療用ゝを尚致し

牧藥いと以るゞくい事

右ゝ通り中上い沢合ゝ私共を襲い危敬するコレラ病除

去い御賢意可らゐ主義と存ず

和蘭海軍方第二醫官
於日本窮理学官
ウエイエルボム、ヘフアン
メードルフヨールト

其の字い長崎出島舶来の蘭人より奉形所へ出上い和解ゝ今ゝ日本
國のゝ古病の流行ゝ記るしありざるとを考ゝ世界のゝ比べゝひるるゝ形紙ゝ

御觸書之写

世間流行の暴瀉病いその療治ゝ種ゝある物ゝ為るゝもその中
素人ゝ為ゝべ死法と示ゝ事緩め是と防ぐゝ為ゝ物ゝ食ゝ為ゝ
本綱と巻大酒大食と情と生物ゝ為れ強き食物と一切給ゝ為ゝ
若し底催しゝ為ゝ病ゝ入ゝ欠合と病ゝ熱ゝ温め発汗芳香
散と云ふ薬と用ゝべ是両已ゝ為ゝ治ゝ為ゝ
熱身冷る程ゝ為ゝ焼酎壹貳合の中ゝ能ゝ入ゝ
と入ゝ為ゝ本綱のきれゝ如し獲ゝ為ゝ足へ小半時ゝ為ゝ
如下板ゝ足へ小半時ゝ為ゝ静ゝ寝ゝ迎ゝ為ゝ

芎藭散　上品　桂枝　細末　益智　日　乾姜　日　各等分

右調合いて一匕を以ていづく時に用べし

芥子泥膏　温飽粉　各等分

右あつき紙に塗り熱き湯に浸きれいのごとく張りて但し用ふ

合いざる時はあつき湯にて芥子泥ごとく練りはてゝ張し

又法

はつ花葉に点ぜこ分一焼酎を加へ少し加へ用べし但紙密を

用ふ水きれは焼酎をつけ頭りに熱身を去べし

但し手足の先等腹冷る所に温熨又は温石を布に包

湯をつゝむる如くに持ふ放程去るもよし

右を治苦流行病急しく諸人難義致しかゝ生病ふ拘つゝ

不審用ゝ害毒花葉法法人伝授の通り愛敬お達ひ

十八月

子位小塚辺治死人ぐう数多之り故手ゝ葉教日その

侯ゝ致し毒奥寄立下若辺涉茶屋ゝ殊之外遠慮之紙まく

歌中ゝ狂更毒蛇体ゝ成ゝ奥葉ゝふれは老代疫病級熱之

之病症お数ゝ中ゝ医師ゝ方ゝ治苦ゝ心配致しかゝ紙ゝ舟尚ゝ仮

埋ゝ義致しかゝ花又ゝ手ゝ致し方ゝ有之郭屋勤番ゝ

之沼矛と云ふ物を持て生筋へて手淚ハ
右之通寺社奉行ゟ生筋へ中淚ハ町中生ゟ得ゟ以埋葬之
儀元年ハ横之中淚ハ

午八月

此節流行之病症ハ多く死亡人多く市中一統恐怖之餘り中ハ
祈禱ゟ喝ゟ祭之神樂或ハ物ゟ所ゟ歌中町内拍子行ハ其之
新早竟彩音除ハ儀ゟ拵き者共ゟ得遣ゟ出ゟ之不業致ゟ
家ゟ毛紙中稼ゟ祈禱ゟ儀ゟ拵別多人数集りハ拵ゟ
ゟ不日ゟ遣此節拍子之用ゟ方論ゟ拍子安儀ゟ之横

兼ゟ中淚亜ハ有ゟ拵ゟ在儀右体ゟ得遣有之ゟ安全く
風宇迫之義ゟ有ゟ宇人ハ
有之ハ尚人ゟ不及中ゟ町役人ゟ迫急ゟ及沙汰ハ家ゟ有
町中不淚拵ゟ觸知ゟ

午九月

○此節深川冨吉町道具屋伝兵衛ゟ病ゟ死ゟ
奥霧ゟ出ゟ其ゟ家ゟ有ゟ物ゟ
完出ゟ其ゟ又家ゟ有ゟ物ゟ
○尚八月中旬佃島漁師伝兵衛ゟ
兼ゟ中淚亜ハ有ゟ拵ゟ在儀右体ゟ得遣有之ゟ安全く
風宇迫之義ゟ有ゟ宇人ハ
有之ハ尚人ゟ不及中ゟ町役人ゟ迫急ゟ及沙汰ハ家ゟ有
町中不淚拵ゟ觸知ゟ

午九月

○此節深川冨吉町道具屋伝兵衛ゟ病ゟ死ゟ
奥霧ゟ出ゟ其ゟ家ゟ有ゟ物ゟ
完出ゟ其ゟ又家ゟ有ゟ物ゟ
○尚八月中旬佃島漁師伝兵衛ゟ

近藤の老翁あつまり祈安産験の祈をとなふくさぐと攻る方
ふや狐彼者の髪を抜出身の方へ逃去ル在あふ人と追失と是と
捕へ召時は打殺しそれば長る老のちふひるく彼狐の死骸を
焼捨く烟とゝ共に遠よこと天に昇ル祠を建て霊を祭りもまつち
尾後大明神と崇るとぞ

○京橋南傳る町壹丁目捕屋伝兵の嬢尚病ふ犯さる也深き
〳〵く絶も入るき死相あれば父母大ひよかど孫き周章近邊の
町醫横田伝兵を乞くそせ〳〵むるに彼医老容姿とちつ孫察
ちくとても命完来ち〳〵さるとも拾葉一帖を乗ふせんとて

調合あとうち彼嬢へ問死〳〵て息ふえ〳〵ふべ医法を牛ふ
そと〳〵は程を死我家へ立帰り〳〵おいかぐ〳〵ふん忽此ふ嬢
いふくそ伝ふ息絶ふ妻あるのかど孫死ふ〳〵むみ
近藤の老をあつまりさぐ〳〵ふ放髪色死相ふ変〳〵
寸孫も通ひ〳〵波時先に代医老を招ふ捕屋ゆて、ふむ老ふ
死骸を棺の中へ納んふる形ふ〳〵ぎふ彼嬢花然とふ、
蘇生〳〵ふ父母ふ〳〵めふの人と再び驚くふふるる驚
い盲亀の深本ふ〳〵ひふる如く新ふる大るふ沢波ふ〳〵絶
かゝ立ふる医法死者へ告ふふ医法い只今死〳〵ふと云〳〵

急べ再こ驚痛嘆〳〵尚病の次急なるゆゑ舌とゆたさるゆえも
いぶこの〳〵きこい病者の死〳〵ゑ已と思ひしい邪く蘇生人と活さんこ
きる医生い忽地ゆ死を死生時ゑ同じうきく手の裏とこの人をよう
連ありされば暗ゲ入らんとせ〳〵稽いゆ用よありたるべとて彼医ゆ
のりこ人送りやり彼方の有用よ迄ても用縁ととゑ思ふきう

○湯治こ組町奥屋何某の妻店ゆ出く品物と変織と元ん
とくその伝例也小半時ゆ百土深きく嗅のあるゆふくさ
きる物出来て若猛毒家絶ゆ彼ゆんとの
一物口中より黒素と吹く立昇り消うせるもゆきのるや

流行時疫

異國名コレラ

一薄羅紗又いうこん木綿或いりんゑの類を
昼夜とも腹と二重ほどまき紅置べし
一桶ゆ湯をいるこうらしの粉と五タ手を其中へ
加え折々両脚の三里の辺まで浸べし
一家の内ゆ何まても炷ものをなして濕氣を除くべし
一一切の菓類を多く食ふべし

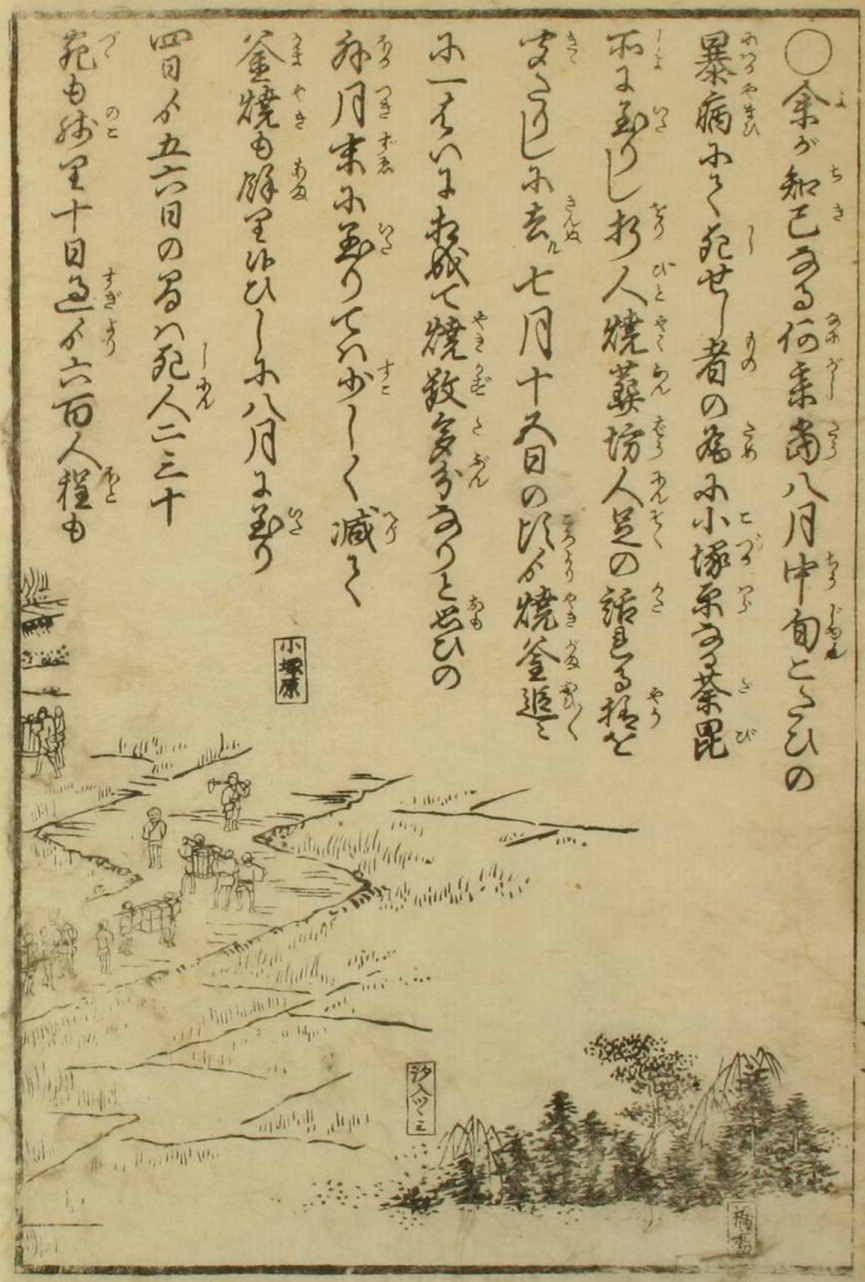
同治法

一此病をうけうりと知らば熱き茶の中へ其茶の
三分一焼酎を入き砂糖をこしを加えそのむべし
又座敷をそこめて風ゆあてぬやうにすし
其上羅紗のきれ又いりんゑゆ焼酎をつけて物身
を残る方なくこすりてよし
但し手足又い腹ならべよく意を注ぎむる
ところあらば温鐵或い温石をあてめ布ゆつこ
浴湯せしれどの心持ゆなるまで摩擦べし

施印

干時安政第五戊午年八月

○余が知己なる伊東南八月中旬ところびの
暴病ふく死せし者の為ふ小塚原へ茶毘
ふる事に人焼墓場人足の結ぶる程と
なりしふ去る七月十八日の比が焼釜迄と
ふ一ケいはゆる数て焼数多ありと也ひの
ふ月末ふ至りてハ少しく減ず
釜焼も殆ひしふ八月ふ至り
四日ふ五六日の間ハ死人二三十
死も殆ひ十日ふ至ふ六百人程も



焼死ひ人ハ此ふ
ゆくハ中と今日ふ
来ふる事ハ
九月二日三日
比ふ成ぬ
骨揚ふも
お成御法の
人骨花金子
伊程出ふ

とも中ゝ火急ゟ焼ひゟハ出来不申と相結ぶり彼人達と加へ居る不逢
ふ積上る棺の数張りゐしてかぞふる不間あふぐ始ハ人通りと雖ども
さふハゝ物辺不用あれハ焼湯の裏つゝ抜出と諸院の図中ゝ指歩きつ
ゝ延ゝ通るに備家ハさもあれと一向家の茶毘不ハ殊ゟ多く棺ゝ入る
湯不ゟれハ往還の傍ふ積揚てあ例ふ充塡し乃ゝ一家の往来のゝ為ハ
ゝ奥家ゝ数多拭をめて水面と色ゝ見ふ新町辻通ふ出さりしが
追ゝ茶毘不ふ拾ゝとふ棺の数往来ゟ引続て上野廣小路まゝてその
数ハのべ人しゝ見ゝ不時の為ハ乃ふ乃ふ多ゝ茶毘不ふ為ゝ
死人とゝ数しき棺数のゝ百七十三ありしとゝ殘屍の服ゝ余ふ結ぶり

○御府内ハ里ハ方町ゝ三十八百十八丁各三十六丁を里ゝして百六十八里
十三丁ゝ内ゝ武家暴浮病流行ふつて死亡人多く傍ゝ救ふ不垂

○表店八十九万十三軒
男　二百ハ十万十ハ人
女　百七十万二十八人
寺人ゝ合ぶちとして武家ゝ
寺万七十ゝ七軒
ゝ子百ゝ八軒ハ合

○裏店九十二万ゝ十二百三軒
男　百十一万千百二十人
女　八十ゝ万ゝ二百八人
寺人ゝ合ぶちとして武家ゝ
ゝ子百ゝ十ゝ六軒
寺人ゝ合ぶちとして武家ゝ
ゝ子百ゝ八十三ゝ二百二軒

○百人　九千百十三人
○出家　七万百十人
○尼僧　三千九百ゝ十人
○神主　八千九百八十人
○山伏　六千八百ハ人
メ九万九千ハ十八人武家ゝ
ハ百ゝ十ゝ人ゝ二百ゝ軒ゝ合
御府内町方総人数合て
メ七百十万千三百十八人
○今般ハ数ゝ後ハ表裏
ゝ限ゝ貧民人ゝの三ゝ不ゝ

○仰ゝ長地伝ゝ之ゝ外
ふハふゝ死亡人ゝ
○貧民男二十一万六千廿人
武家ゝ　寺ゝ方ゝ千八百ゝ
○同　女子廿万七千ゝ十六人
武家ゝ　八千百十六ゝ八斗
右ゝ内ゝ般ゝ六万俵ゝ
別ゝ分ゝ以ゝ不ゝ
ゝ貧民男ハ数ゝ合て
メ二万三千九百十七ゝ八斗
ゝ此ゝ斗ゝ為ゝ代
ゝ金六万両ゝ

○流行の病をうつす新人を此中に生名望方に呼べし御
[illegible]の差別あるべし又余病もはるべき歟

書家　大竹蒋塘　作者　緑亭川柳　画師　菁〻所其一　役者　松本虎五郎
同　市川米庵　同　柳下亭種員　作者　樂亭西馬　同　尾上橋之助
俳諧　惺庵西馬　画工　歌川國郷　太夫　清元延壽　同　嵐小六
同　福芝齋得無　角力　宝川石五郎　同　清元滝太夫　同　嵐岡六
同　過日庵祖郷　同　万力岩藏　同　清元鳴海太夫　三弦　岸沢文字八
狂哥　燕栗園　三弦　杵屋左二門　同　清元秀太夫　作者　五返舎半九
講談　一竜齋貞山　同　鶴沢戈治　同　都与佐太夫　女匠　都千枝
咄家　馬勇　同　清元市造　太夫　常磐津須磨　女匠　常磐津文字栄
同　上方戈六　碑名　石工亀年　同　常磐津和登　同　同　小登名
画工　立齋廣重　画家　英一笑　同　太夫　竹本梶尾
同　櫻窓三拙　狂哥　六歌園　人形　吉田東九郎　同　豊竹小玉

○尚時のされ妻も[illegible]を[illegible]
備金七安波安一弦〻〻〻

埋もるる　焼傷の国の苦の中を行くとて魚釣くるる人　他生らん

「かるいろろべ二日で佛なるつるかヤイ

知恵と徒の返りのろひのもふゆあを月出るろう寺　赤る　孫

○八月朝日より晦日まで日々書ふお祓い死人の員数

朝日　百十八人　二日　百七人　三日　百六十六人　四日　二百十七人

六日　二百五十人　七日　四百六人　八日　四百十六人　九日　五百五十六人　十日　五百五十六人

十一日　六百七人　十二日　五百七十九人　十三日　六百二十六人　十四日　五百六十八人　十五日　五百八人

十六日　五百二十六人　十七日　五百五人　十八日　五百五十六人　十九日　五百五十七人　二十日　四百二十六人

廿一日　二百五十六人　廿二日　二百五十六人　廿三日　二百十六人

廿六日　二百九十六人　廿七日　四百五十六人　廿八日　四百二十六人　廿九日　二百二十六人　廿日　二百十六人

一万五千四百五十五人

紙あるそれ中

式部全書之式部の人数の内の出数一万八千七百五十七人　九月ニ祓ふ

九月ふ祓ひてハ去ふ減しニ月ハいろ六十人ふ祓ふ文ようハ去ること

お止　色例ふ祓十人

或院主の後作しふ曰く八月ヶ月ふ送礼数九一ヶ年ふ来ひし所

年月ハ仮禁門数　老爺　又ワあの毒業人を度ひ大概　毒作公祓ふ

とも多ふ文ようハ式部ハ石工　定月度も皆ふ集りて万ふ合ふ礼

井戸掘職人と教えるふ　御ふ安塔をなうとなん

○千住掃部宿ふ
茶屋婆子代弁
とめくるふるわ
あきんどあり
青海竹廿日民
濱ぞ山長ふ
ありて
途中今戸の方より
民と刺ちぶち疲れ
色黄ざめる若き男の
すがたを縛ふて
退いまて
まるふ

ふ今こう
綾ーとまべ
ふのやら
ふ人の
ふつ
ふ
ふ
ふ

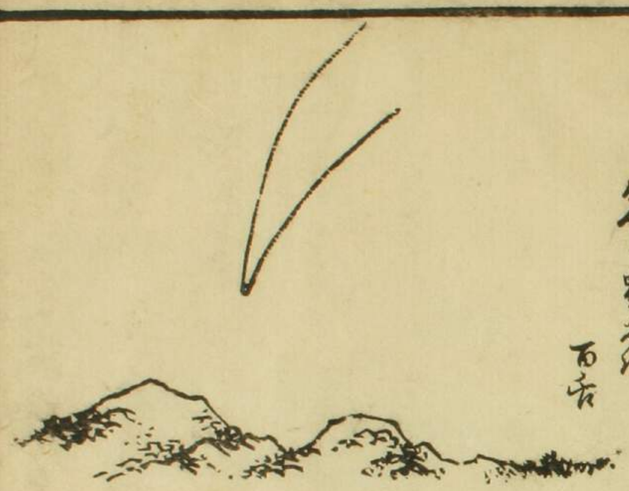
○湯屋の辺ふ見くるそを
支婦の思ひくろ支ふ
久ろく病ふ邪て氏氏
おしく役ろこふ
刻きこと考ぐ之長
自由ふ〜もそのあるる
りのハ今の世ふ稀ふる
貞節ふて支ぶ考〜の
病ふ朝夕の烟り立ふ
その方ひく家主働きふ
るどーそのの日とータふ邪ふ
泊りて支の今抱ものころふ〜も
ふるふその書こびの暴病ふ
犯さと一日病てその報
絶ふ家成ろぶ
懐妊して九ヶ月ふ
成りて初已若
年寄て法合ー

▲ふふ号び
その支が
枕ふ
そろて
背揚ふ
筆まる月
ふ初と
乃川縞ふ
愛恋と
別離と
食ぜーぐく
焼料を
床ぜうへ
別ふ
安養の
料を

支ハ病て
薬式の
ふ為も
ふうしふ
ふ作て食
るとふ頼へ
焼酒ふ送う
ふ月と経ー
去ふ三度りぬ去るふその
秋の書ある若焼酒の
薬坊ヶ格ひふ考ひらと
支ぶ考ーの病ふ邪ー
用ふ考の打ふ又考ぶの為ふ
一倍の出入ありその後の郷計考
果ふんと考へ見のく迷ひの
病ふうとさめーと方法ける
邪するふ考ら駅ふ考ひ薬坊も考考る▲

▲ふぎも
ふうひ
ふこど

八月十八日のあさ　ありとや　数寄屋町　大尾　出後　名の裏　煙筒　のちげう　後世
の名　俗ふ　長病　神　月ド　名屋の　若者　食　北狐の　分る　あやし　大勢　見　見物　ける　病人の中
あハ　系　北の　若　系　系　ハ　有　ハ　猫　猫　社人　使の　若　ハ　代　有　我　ども　ハ　ハ　れ
ア　ア　ニッ　ア　中　ふ　ア　ア　大の　ア　ふ　食　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア
儀　ア
北狐　ふ　分　ア　ア　ハ　狐　祝　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア
ア　ア　表の　ア
中　ア
ア　ア



ア　ア

○義大郎儀の
藩士本津氏なる
人手柔剛勇の
武
術も又抜きき
達人なるが今殺戒
秋のよりうりとや
者達より退出して
南平ふ町るぶ人まど
書もまけまび猫を知りてる
と
家のを引出けにふへて藤
平ふ郎うんとするを
藤次のぼうり
最妻しき
美形の
妖怪
怨霊と
変化
本津氏ふ
見かくるふりのくし
どさんうもと分をちづして猫ひと
振うり藤く妖怪の表向月
ぐけて切有るふ
氏振勢みへさ者きしんや
かの妖
怪の者を
おぐらしを外の方
うて逃んとすると
本津氏逃さじ追らめ
辛くして是を生捕
猫ごとらしてうく
見るふ見年絵程みて
高時考藤の流汐せるその
虚ふ仏地伝人とふ巳
ちやむるりのとも笑えし

○中橋嶽金所ふ年間大英と
いへる町医あり　そびの
暴瀉病ふ依の医師の
名を称うる病人とも自己
業易医業を尽して苦く
年後さもうしぶ
或歌を聯ふ祝賀のり
ありて変ふ振るまおーく
張町ーて家ふ降り森まーん
とーける時嵐のめさ獄ぬ
大英ぶ傳ふ寄ひしぶ
アレ嵐の雪ふ疾退け

よと書ふ指揮
せーうと書の月ふい
更ふふまもを発角をる内
ソレ嵐めう稼へ入ういうぜんと
苦ーこ叫ぶふ入うこ必ふ不えまとう
ぬまび書も立稼ぎその布と
布とうて絞ゑとするうち近布の人も走
あつまるふ大英い最ゑーけふアレ又稼へとう
うう月へむぐうとう悩乳するうちそびい
稼へ入うこて絶ふその伝ふ点絶けるその火急ゑるこまうもあーー
の新ひの雪美あるう粉ゑう追あーそその一ッ二ッを後ふ揚て万ー年の
かーるう　あーん時の知ふ書飛つをとうーれう

茶の大英の張しふ仏て死せざる者も数多あり千療治うとを尋ふ彼の
分神するふくまて処と志うと捕へ又法先を張るどして孤分を責うがゆく
いざ退そくう退うびい彩のゆしと処と南とび名化恨との金るもありまて
手処と実書き血と出して伸るあり或いを必ずう悪をうち考うを敬ち
敬ドうるど実ふ不思議のるどもるう

○時芸の茶表

さくいる田のる場きふ志う大法度の在安る表山文伸ちつ人あり此人
武るふいをしてきても芸るふ跡きと必ずまうう法しもあ月のるるが
或夕乳分魚多猫分の仏安さい飯食も飲を構うるが飯まの法ふ枕呆

彼やう殺そうと度を見て見まび度ふあらをして苦ふ殺いせるどくるまて不雷
ふ必び尋まび泰い原祈のまるが法自寄りと仮せうとのふ遠い速歌のあを
るる若猫仮のるるまび一月痛ても疑深るう疾を出ようと此しまび彼の光人
微多つのやとよを色い悩さど南ぐふ仮てのいらび邪ふ原及るまどとうるく
さうび彼処の一下男ふ入て休生あまうと法せび つりと見抜くふいと紙しげる老
幼男女ぞろ〳〵一下男人さうと見しい幼度孤老人やうて孤を寄一渠多い
食〳〵家着厲南うの礼ふい彩とそと苦のどく猫主を抜く老を門戸ふ法
度び我ら孤一人も返入まうど芸や入るる家あるい氏礼とるて分門を抜を病人
の家のう人度て色るび命と方を仏抜るして必らを氏年秋

前

ふあり多くの人と聞けよと仰せられて一ト巻ふ入しぶ巻日もそれの一巻ふ物
多く自己も巻の巻ふ仰せ最快く起きてまづ例のごとくふ庭へ出づ中巻
い見とりて皆の猫の抱きたい新迷ふ如初ハ立てまづいとゑひしゐと洗らふ
付て左衛門ゐ者りと後ふ巻しと仰せびゆ紙も書き書紙自己も一の紙ひ
あり且あ者らしと知らのて来い人ふ作しもせず六月も巻七月和旬藥
地ふ物のまゐせる面変へ月あり熱きゐるゞ彼ゐ変ゐ 痢疾仮近月あり
此六月物悪ふ作しのきしと文左衛門除の孔二枚且仰方の丸薬と変して
あ人多ゐ〜ぞや今ゐ新屋ふ猫病ゐて最悩める悪ゐ人ありと洗て乞れて
熱止ぐゐ〜物ゞ宅ふて見と拵へ多ゐしゞ夫翌日ゐ病人食礼と作

して迷ふ全快るせしとあり見彼の物ゞ六月中ち月不辛ふ者ふ一時
変初洗と後しゐると仰へ文ゐるものゐ文ゐ彼の面変ふて大きふれと
邪毒しゐ乞ゐ〜と乞変る中ふ人洗れ者あり大きふ見と色にせしゞその形ふ
病付丸しゐるゐ〜外見後の孫ありて孔と乞りの多きゐ又奇とする老人の
言葉ふ武秋流ゐといひしゐゐ孔の表面の邪とゐふ文字ふて例の猫病ゐ
しぬ

あ文文 戊午年 六月廿四日
孫〜〜紀之助 忘々手
邪神王 定保

指形

白澤山圖

毎夜この名を
枕かたへく書を
とれば山のあとこそ
もろくの邪気も
さるなり

神さちがせ活を
ゆく魂のをへい
のゝみちとこの
ちふへさよめて

于時安政五
戊午季穐九月

天壽堂藏梓

實